

# 「何のための報道機関かをつきつめて」

**尖**

閣諸島の日本領海内で

中国の漁船と海上保安庁の巡視船が衝突した事件。

海上保安庁が撮影したビデオの流出がマスメディアを震撼させた。

投稿先は、インターネットの動画サイト「YouTube」※1。

なぜ既存のメディアではなくネットだったのか。告発者にとってマスコミはどう映っているのか。

映像を投稿した元海上保安官に話を聞いた。



## 一色 正春 元海上保安官

プロフィール

1967年生まれ。元海上保安官。尖閣諸島中国漁船衝突映像流出事件で映像をユーチューブに最初に投稿した人物として、メディアの注目を集めた。国家公務員法違反に問われたが起訴猶予処分が下された。

### インタビューの目的

沖縄県の尖閣諸島の日本領海内で起きた、中国の漁船と海上保安庁の衝突事件。外交に与えた影響もさることながら、事件自体よりも、現職の海上保安官が事件の映像を動画サイトに投稿したことに衝撃が走りました。

以前はこうした映像や告発はマスコミに集まり、検証を経た後でスクープとして報道されることが常でした。しかし、核心的な情報や映像が、今やどんどんネットの掲示板や動画サイトに投稿されるようになっていきます。「映像・ユーチューブ」とテロップが載ったあの映像が繰り返し使われるのを苦い思いで見たのは、私だけではないでしょう。今回はその象徴的な例でした。

告発者は今、どのようにマスコミを見ているのでしょうか。

### なぜ既存のメディアでなく、動画サイトだったのか

報道機関をまったく信用してないということではありません。当時の心境としては、追いつめられており、多くの人に見てもらうため少しでも高い可能性を考えていました。

過去に海上保安庁は、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の不審船事件※2のときなども映像を出しているわけで、今回も隠す理由がありません。なんらかの理由で出ないけれど、そのうち出るだろうと思っただけで、出さないと政府は出さない、だったらマスコミが取材して出せばいいのに、でもどちらも出ない。

これは官とマスコミが一体になって隠しているのではなにか、とも思っていました。被害妄想に陥っていたかも知れませんが、情報を持ち込んで流せなかったと言う放

送局もあると聞いたこともありましたが、今でこそマスコミの方と接することができていますが、以前はメディアに対して受け身でしたから。

当初はCNN<sup>※3</sup>を選びましたが、それは客観性の問題でした。たとえばNHKに提供したとすれば、中国と新華社通信<sup>※4</sup>（中国の国营テレビ）の関係のように日本に都合の良い編集をしているのではないかと、中国から言いがかりをつけられる可能性があります。そういう理由でNHKで放送されるよりCNNで放送された方が信じる人が多いのではないかと思いました。0・1%でも効果が高い方を選ぶことが当時の心境でした。それにしてもYouTubeが一夜にしてあそこまでの速度で広がるとは思っていませんでした。そんな経緯を著書『何かのために sengoku<sup>38</sup>の告白』にも記しました。

メディアが情報を受け取って検証して放送を流すというのが、これまでのマスコミの考え方だと思いますが、告発する人たちにはそれを信用しづらい時代になってきていると思います。放送局の場合、全体のなかから一部を選ぶ作業があり、切り取って流した映像だけを見るので、それだけで印象をもってしまう、それで偏った放送をしていると言われたりすることもあります。

その対極にインターネットなど「ただ」流せるものが出てきました。インターネットは双方向なので、それを見ていろんな人が解説して、自分で判断することができます。どちらがいいのか分からないが、今はその過渡期だと思います。

——偏った報道とはどういう意味ですか。

全体から一つを抽出したときに、事象全体を反映していないという意味です。物事の表だけではなく裏も見たいと視聴者は思っています。情報を分かりやすく解説することはいいいことだと思います。ただ、事実は事実として出していないのではないのかという疑念がぬぐいきれません。取材先なのか、メディアなのか内情は分からないが、自分たちに都合の良い情報だけ流しているのではないかと。

私が投稿したビデオにしても、あのように衝突シーンだけを抜粋されて編集をして放送をされてはダメだと思いましたが、皆が見るといって、分かりやすさは確かに大事ですが、衝突シーン以外にも重要なことが沢山あったのに、そこに注目する解説者等はいませんでした。一方インターネットの場合にはそこに映像があり、掲示板があり、視聴者が書き込みをし、解説してどう思うか判断できます。どちらを見るか決めるのは最終的には見ている人たちです。

一般大衆は無知だから、プロの俺たちが色を付けて編集するんだ、というスタンスはもうダメだと思えます。テレビのなかのジャーナリストや解説者と呼ばれている人等の話は、我々マスコミが吟味して出した物でないと情報を流してはダメだ、その言葉の裏には僕たちは賢いから、僕たちが選んだものだけ賢くない視聴者に教えてあげる、そう自分には聞こえてしまう。そうではなくありのままを見せて欲しい、それが本音です。視聴者の多くは客観的事実を見て、事実を判断する力がだんだん上がってきていますから。

※1「YouTube」  
世界最大の動画サイト。  
個人が映像を自由に投稿  
できる。NHKも「NHK  
Kon-line」を設  
置している。

※2「不審船事件」  
2001年、日本領海内  
で北朝鮮の工作船と巡視  
船が交戦した事件。

※3「CNN」  
アメリカのケーブルテレ  
ビ向けのニュース専門放  
送局。本拠地はアトラン  
タで全米10都市と世界26  
都市に支局を有する。世  
界各国で24時間放送をお  
こなっており、チャレン  
ジャー爆発事故の生中継  
や天安門事件など歴史に  
残る出来事の放送で評価  
が高い。

※4「新華社通信」  
約1万3000人の社員  
を抱える中国の國務院直  
属の通信社。外国に約  
130の支局、600  
人あまりの特派員を抱え  
る。中国の一般ニュース  
を海外向けに配信する  
ほか、政府や共産党の  
ニュースを独占的に配信  
することが多い。



——そうはいっても、時間的制限もあり番組枠ですべてを流せる訳ではありません。

その事情もわかります。でも最近では、編集Ⅱ悪のように見られている気がします。例で上げると小沢一郎さんがテレビは編集されるから編集なしのニコニコ動画<sup>※5</sup>で会見をやると言っていたように。インタビュ全部は使えないにしても編集のあり方に不信が募っているのに対して、放送局としても「そうではない」ということを強く言っていかなければならないし、やり方を模索していかなければならないかと思えます。たとえば使わなかったインタビュは別の媒体に掲載することもできるでしょう。

はつきり言って高速インターネットが充実してきている昨今では時代は変わっています。今までの前例、踏襲、価値観や相場をやったり、横（＝同業者）だけを見ていたりすると、全体として必ず遅れていくと思います。受信料を払っている顧客から要望を聞きニーズをきっちり分析し認識して、日々変わっていくなければ、NHKも取り残されていくと思います。

——横並びではなく、この問題はこういうものだという長年の経験からの歩留まりではないかと思えます。

テレビが王様の時代はそれでよかったです。でもその地位を脅かすものが出てきています。外から見ると横並びをしようとしているのではないかと思ってしまう。今回の映像もどこかが映像を流したら各局が映像を流し始めた。テレビでは放送されないがインターネットには載っているとなると、短絡的にテレビよりインターネットを信用してしまう人が多くなる。テレビが自らそのようにしているのではないのでしょうか。

※5 「ニコニコ動画」  
日本の動画投稿サイト。  
ユーザーがテロップで動画に「つつこみ」をいれたりできるのが人気。最近では官邸や政治家の会見を中継することもある。

——任意捜査で事実上の拘束を経験されました。その時の報道の印象は。

捜査当局の発表は事実と違ったことや憶測が出ていましたが、身柄を事実上拘束されており、何も話せずの状態でした。捜査当局が自分たちに有利な情報を流し、マスコミがそれを検証せずに情報を流しているのか、本来マスコミがフィルターとなって情報を流すと言う使命と役割があるとするれば、これは本当に難しいと思います。被疑者は実際にそう言っているのか、背後関係はどうか裏を取って、そこまでやって報道してほしいと思います。前から思っていました。今回の事件で捜査される立場になって特にそう思いました。

職業柄、検察のやり方は普通の人よりは知っているつもりです。思うとおりにコントロールされたり、それに乗せられないようにしてほしい。たとえば、私は捜査当局に対してハンドルネームの意味を除いて全部を正直に話していたが、協力していないという報道もありました。協力をしていないから逮捕にもついでいこうとする思惑なのか、意図は分からないが事実としてそうでした。

### NHK、マスメディアに求めたいこと

何のために報道しているのか、突き詰めて考えてほしいと思います。

民放は商売で視聴率が必要ですが、NHKが同じ土俵で放送する必要はないでしょう。

いろんなことをきっかけに「何故」を追及してほしい。この事件でもそうです。なぜ日本からは尖閣諸島へ行けないのか。昭和19年まで人が住んでいて、日本の島でありながら行けない場所があるのはおかしい、何故だろう、みんな

な疑問に思うでしょう。国境の歴史など、尖閣諸島への理解が深まるし、衝突事件をやるより有意義でしょう。竹島や北方領土も同じです。多くの人が意識を高めるのではないかと。公共放送として中立性が必要なのであれば、そこに中国の意見と日本の意見を両論併記して、あなたはどうか思うのかを問いかければいいと思う。尖閣諸島や北方領土、竹島の問題を掘り下げて取材するのはNHKの役割で他の局には難しいのではないかと。決着の付かないテーマでも、対極の意見を同じだけ出して最後はそれに対してどう思うか、と問うべきではないか。無理に結論は出なくていいのでこういう事実とこういう意見がある、あなたは日本国民の1人としてそれをどう思いますか、そういう放送をもつとしてほしい。

もう一つは取材力です。放送を見ると、通り一遍の放送になっている。テレビをつけるとジャーナリストや解説者が事件の話をしていて、無難で同じことしか言わない、映像も衝突のシーンしか流さない、あの人たちは何も取材できていないのではないかと感じます。

例えば、あの場所で外国漁船が漁業をしていたことは犯罪です。外国人漁業に関する規制の法律は、有罪になれば漁船を没収できる、帰国させることはできない。なぜあの矛盾にみんなおかしいと思わないのか、乗組員があんなに早く帰国できる理由はなにか、取材する側が勉強してほしいと思います。衝突の派手な場面だけではなく、衝突前後の乗組員の様子、外国漁船が日本の領海内で漁業をしている様子、海上保安庁がどのような追跡をしたか、そのような映像をピックアップして欲しい。見て欲しいところはたくさんある。本当に真剣に44分間見たのか、何かを感じる能力があるのか、そこが第一段階です。同じソースでも感

じ取る能力は取材する人間に求められると思います。取材する個人にその知識がなかったとしても44分の映像を分析出来る人は取材すればいくらでも出てくるでしょう。各局一様にどのチャンネルでも同じような映像しか流れていなかった。テレビ局の椅子に座ったままで解説していた人の言葉を思い出してほしい。皆、一般受けのすることを並べていただけではないでしょうか。

### 報道機関の姿勢そのものを問いたい

神戸の記者クラブが神戸の海保との間で定例記者会見を開いています。事件が起きてから会見を開かないことについて、各社からの抗議文を見ましたが、A4用紙半分くらいに決まり文句が書いてあるだけでした。本気で会見しないことに対して抗議するのであれば、新聞の紙面やテレビのニュースを使ってでも視聴者へ、当局の姿勢について訴えかけるべきではないですか。社を挙げて抗議すべきものではないのは馴れ合いがあるのではないか、一社が違った意見を言っても他が相手にしない、裏で取り決めでもあるのではないか、そう思っていました。

情報を出さないのであれば、それ自体を報道して批判すればいいではないですか。当局との関係が崩れるのが怖いのはわかりますが、結果として情報統制のドームになってしまつては意味がないですよ。言うことを聞かないと餌をやらぬ、という関係に外からは見えてしまう。いわゆる親方日の丸と既存メディアが持ちつ持たれつの仕事をして、皆同じ方向で報道している、そのように感じます。

他の報道機関からも、なぜ自分の所にビデオを投稿しなかったのかという質問を受けました。でも、その前にどれだけの努力をしたのでしょうか。衝突事故直後は機密事項

にもなっていないかったので入手する方法もあつたでしょう。真剣に取材に来る人の姿を見ると、信用して話をしようかと思う人間もいます。

そして、私が機密を漏洩したと言いながら、自分たちもYouTubeからの映像を放送しているとなると、これはまるで共犯者ではないかと思えます。政府は機密情報だというのが本当は機密ではないので流すと言うのであれば分かるが、メディアの「いいとこ取り」に不信感を感じます。自分たちは信用されなくなったのでしょうかとシタリ顔で言っている人がいますが、自らの姿勢を見て欲しい。

あの映像がなぜ秘密なのか、それを追及しない。44分の映像は私がアップしましたが、その他の映像の公開をなぜ求めないのでしょうか。そもそも、今回の件以降、報道機関は現場に行つたのでしょうか。

私のところに来る記者は、とても情熱のある人が多いです。でも、組織を介すと放送内容は結局どれも同じようになつてしまつたように感じます。視聴者の方を向いて、本当のことを報道していく。その本気度を報道機関に求めたいと思います。

## インタビューを終えて

NHKに限らず、報道には長年の蓄積に裏打ちされた価値判断や取材先との距離感があります。ネットという新しい媒体の出現によって、それが揺れているのかどうか。早計に判断できませんが、「全てを流す」ことができるネットに傾いている告発者や政治家が増えているのも事実です。

一色さんは放送業界に詳しいわけではなく、インタビューでは厳しい言葉も出しましたが、あえて忠実に掲載しました。幅広い人々からの情報の受け皿になり続けるには、いま一度「社会のために」自分の取材があるのだということに肝に銘じようと思いました。

報告 中央組織部長 米原達生  
中央放送渉外部長 竹内哲哉  
放送系列委員長 永田則彦